

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 22 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520749

研究課題名(和文) 特別支援教育での外国語活動における留意点と教員支援に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Foreign Language Activities in Special Needs Education: fundamental issues on some focal points and ways of supporting teachers

研究代表者

中山 晃 (NAKAYAMA, Akira)

愛媛大学・教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：70364495

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：リズムチャンツや感情と表情を一致させるための活動など、児童の特性に合わせて特別支援学級内で実施したアクティビティーを通して、「自己肯定感が高まり情緒が安定したこと」や「他者の表情から気持ちを読み取る方法を理解したこと」、「アクティビティーや日常会話時の表情が豊かになったこと」などの効果がみられた。また、ICTを活用しながら特別支援学級における自立活動とより接点をもった活動を仕組むことで、自立活動と外国語活動の両方の活動に相乗効果が期待できるという先行研究結果をあらためて支持することができた。

研究成果の概要(英文)：This study reports on three classes of foreign language activities conducted in special needs education in Japan by describing how students enjoy the activities in English as a foreign language and suggests the following: First, even though students have developmental disorders, teachers can facilitate students learning by installing ICT devices which enable them to make attractive materials for students, and by introducing SST in class, they also help students concentrate on the content. Second, a lack of research studies might not only lead to insufficient support for teachers, but also cause some misgivings about the legitimacy of conducting foreign languages activities in special needs education in Japan.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：早期英語教育 外国語活動 特別支援学級

1. 研究開始当初の背景

国際社会のグローバル化が進むにつれ、わが国でも国際理解教育を含めた英語教育に対する期待と変革が求められてきた。そうした中、児童に対する外国語教育における転換期といえる 2002 年度から、小学校においても児童が英語に触れる機会がもたれるようになった。いわゆる総合的な学習の時間という枠組みの中で、限定的に行われてきたものであるが、2011 年度からは『外国語(英語)活動』という形で、基本的に全学校で必修として行われることになった。『外国語』活動というように言語を限定しているわけではないが、その手引きとなる『英語ノート』が文科省から各学校に配布され、かつ学習指導要領にも原則英語で行うことが明記されていることを踏まえると、英語を題材とした外国語活動を実施することが教育現場には求められているといえる。

2003 年度以降の文科省の調査により、英語活動を行う小学校は、全小学校の 9 割後半台までになり、活動時間数も増加傾向にあることが分かる。しかしながら、小学校における外国語活動は、まだその方法論が定着しておらず、設備面や人的資源という点からも未整備な部分があることは、否めない。確かに、各自治体の教育委員会等が英語活動実践のための講習会を開いているが、浸透するまでにはもうしばらく時間が必要であると思われる。

こうした状況の中、特別支援学級においてもこの外国語活動は実施されることになった。ここで課題となっていることが、担当教員への支援が普通学級担当者以上に不十分な面があり、かつそうした実情に対する関心はあまり払われていないということである。実際に特別支援学級で外国語活動を試みている教員にインタビューした結果からも、不安と支援を要望する声があり、こうした要望に対応してゆくことは、教員のみではなく、特別支援における児童達への支援になることは、明らかであり、急務な課題といえる。

特に、特別支援学級での実践事例が通常学級に比べて極端に少なく、また実践経験者が少ないこと、さらに公開授業という形で発表されることが少なく、どのように実践するか分からないということ、特別支援学級における英語ノートの使い方など実践方法については各学校一任になっており指示がなく手探りであること、特別支援において外国語活動をするものの意義が不明瞭であること(保護者・教員の意見)など、特別支援学級における外国語活動には課題が山積しているという現状が課題の発端であり、こうした課題への取り組みは特に有意義なことと思われる。

2. 研究の目的

本研究では、下記の 3 つを遂行することを目標とする。

- (1) 特別支援学級で学ぶ児童・生徒への語学教育に関する教育的効果に関する文献調査
- (2) 特別支援教育における外国語活動の授業参観と実態調査
- (3) 教員に対する研修やサポート体制の現状把握とネットワーク構築の基盤形成

なお、これらの結果は、規程の報告書としてまとめ、かつ了承が得られた場合は、各指導案や実践報告、実践の様子等をデータベース化し、必要な教員に提供できる形にする。また、国内外の各種学会等へ論文を投稿し、本研究課題のピアレビューによる外部評価と一般公開を積極的に行うことにする。

本研究の独創性としては、第一に、小学校における英語活動が 2011 年に必修化されるに当たり、本研究課題は急務な内容であることが挙げられる。特に、特別支援学級(教育)における外国語活動に焦点をあてた研究や報告は極めて少ない。小学校での英語(外国語活動という枠組みだが)における方法論や人的支援も十分とはいえない現状で、特別支援学級への関心は高いとはいえない。そこで、本研究では、特別支援学級での外国語活動に焦点を当て、その実態と教員支援のあり方について、調査・検討してゆく数少ない研究のひとつとなりうる。

また本研究は、単なる実態調査や授業参観を目的としたものではなく、教員サポート体制を含めて、教育改善の仕組み(ネットワーク構築)の基盤形成を目指している。これは、特別支援学級での外国語活動が公開授業として発信されることが少なく、悩みや工夫などが教員間で共有されにくいことが原因であり、このような仕組みへの取り組みは重要なことであろう。

本研究の教育実践への反映と応用力の方向性に関しては、特別支援学級で英語活動を行う際の留意点、例えば児童の特性理解に基づいた活動内容の立案(単純化、視覚化、補助教具の作成法等)や基本方針が現場の教員に提供できる。このことにより、授業改善の基本方針や授業アクティビティーの工夫等を支援できるものと考えられる。

単なる実践報告で終わらせず、次の実践に結びつけるための上位組織としてのネットワーク構築の基盤形成とその仕組みを教員研修に生かすことができる。特に、特別支援学級における事例報告をしっかりと蓄積し、共有できる形にすることで、教員の相互交流を促進できると考えられる。

現在分かっている当該分野(教育心理学や語学教育、認知科学)の研究結果を、特に特別支援教育で外国語活動をされている先生方に情報提供することができ、理解を深めることに役立つと考えられる。

本研究課題の社会的価値と波及効果(意義)については、特性に合わせたアクティビティーの発案や成功・失敗事例などの共有で、授業改善支援が充実し、特別支援学級での外国語活動が拡充され、ひいては児童への教育

の向上が見込めると考えられる。特別支援における外国語活動の公開授業は少なく、悩みや工夫案が共有されにくい現状があるが、教員相互のネットワーク作りのためのモデルを提案することで、アイデアのみならず教員の相互交流が促進されると考えられる。現時点では、特別支援における外国語活動の研究自体は少ないが、本研究遂行後には、他の研究グループなどの先行研究（基礎資料）となり、当該研究課題の底上げの契機となり、教育・研究活動が活発化することが考えられる。

3. 研究の方法

本研究の計画・方法は、次の3段階から成る。(1)調査・観察段階：これまで発表されてきた先行研究調査をまとめ、特別支援教育において外国語活動を行う際の留意点を研究的側面及び理論的側面からサポートする。具体的には、レビュー論文及び展望論文の執筆と発表を行う。(2)授業案作成と実践段階：先の調査と授業参観を行った結果等を踏まえ、フィードバック・ミーティングを行い、より具体的に有意義な特別支援教育における授業案とアクティビティーの策定を試みる。(3)報告段階：単なる実践報告で終わらないために、次の実践に結びつけるための上位組織としてのネットワーク形成（研修会の実施とサポート体制の整備）を行い、成果を学会や学術論文（報告書を含む）として発表する。

研究体制と役割分担、スケジュールに関して、本研究は、平成23年度から平成25年度までの3か年のプロジェクトであった。研究体制と役割は以下に示す通りである。研究代表者の統括の下、該当の研究者・実践者とともに研究を進める。ただし、常に研究チーム全体で連携して、研究課題に取り組んでゆく。

平成23年度の研究計画と方法（調査・観察段階）として、本研究目的(1)の「特別支援学級で学ぶ児童・生徒への語学教育に関する教育的効果に関する文献調査」を行う。各研究分担チームのテーマに基づき、これまで発表されてきた先行研究調査をまとめ、特別支援教育において外国語活動を行う際の留意点を研究及び理論的側面と実践的側面から考察、展望する。具体的には、レビュー論文及び展望論文の執筆と発表を行う。

平成24年度の研究計画と方法（授業案作成と実践段階）として、本研究目的(2)の「特別支援教育における外国語活動の授業参観と実態調査」を行う。特別支援教育での外国語活動の授業参観と前年度の調査結果を踏まえた実践を行う。以下のPDCAサイクルに従い、授業参観及びフィードバック・ミーティングを通して、より具体的に有意義な特別支援教育における授業案とアクティビティーの策定を試みる。

平成25年度の研究計画と方法（報告段階）として、本研究目的(3)の「教員に対する研

修やサポート体制の現状把握とネットワーク構築の基盤形成」を行う。上記（前年度）のサイクルをより円滑に次のステップへと運ぶためには、これらの関係をうまくつなげる組織が必要である。研究のための研究ではなく、また、単に実践報告で終わらせないために、次の実践に結びつけるための上位組織としての教員ネットワークを形成し、本研究課題後の研究成果の普及を目標とする。

4. 研究成果

本研究課題（3か年のプロジェクト）では、平成23年度から小学校において始まった「外国語活動」について、特に特別支援学級での指導上の留意点と教員支援に関する基礎的な研究を行った。なお、本研究では、下記の3つを遂行した。（初年度）特別支援学級で学ぶ児童への語学教育に関する教育的効果に関する文献調査、（次年度）特別支援教育における外国語活動の授業参観と実態調査（実践提案）、（最終年度）教員に対する研修やサポート体制の現状把握とネットワーク構築の基盤形成

初年度の成果として、情緒の安定を図るとともに、友だちとのかかわり方や集団での適応性を高めることめざし、「デジタル読み聞かせ」と「What's missing?」というICTを活用した教材を作成し、英語活動の研究授業を行った。成果として、スキャナで本を読み取りそれを大画面テレビに映し出して読み聞かせを行う「デジタル読み聞かせ」では、子どもたちの「本への興味関心を高める」とともに、「集中力の向上」を図ることができた。また、テレビ画面上に提示しているカードを1枚（または数枚）消し、消えたカードを答えさせるゲーム「What's missing?」では、参加児童は友だちと協力し合いながら勝敗を気にせず楽しく活動することができた。授業参観者からは、「集中力を持続させるのに効果的であった。」「リハビリ的要素のある活動が含まれていた。」「教師の発音やイントネーションを真似するなど、英語に慣れ親しむ姿が見られた。」等のフィードバックを得られた。今後の特別支援学級における外国語活動では、ICTを利用することで、視覚優位である児童への理解支援や、児童の興味・関心をひきつけることができること、積極的な活動への参加が促せる等の利点があることが示唆された（久保・金森・中山, 2012）。

次年度の成果として、情緒の安定を図るとともに、友だちとのかかわり方や集団での適応性を高めることをめざし、SSTを導入した自立活動の枠組みでの英語活動（当時）と外国語活動を行った。結果、SSTを取り入れたことで、「他者とのかかわり方を学ぶこと」や「生き生きと自分らしさを表現すること」、「英語という新たな感情表現方法への気づき」など、アクティビティーの内容に幅をもたせることができた。また、単に「楽しい」だけの外国語活動ではなく、特別支援学級に

おける自立活動とより接点をもった活動を仕組んだり、ICT を活用したりすることで、自立活動と外国語活動の両方の活動に相乗効果が期待できることが示唆された(塚田・吉田・中山, 2013)。

最終年度の成果として、リズムチャンツや感情と表情を一致させるための活動など、児童の特性に合わせて特別支援学級内で実施した3つのアクティビティー及び、それらと並行して行った交流学習1に際しての工夫や留意点、授業中の児童の様子や反応から得られた知見を報告する。一連の実践を通して、「自己肯定感が高まり情緒が安定したこと」や「他者の表情から気持ちを読み取る方法を理解したこと」、「アクティビティーや日常会話時の表情が豊かになったこと」などの効果がみられた。また、ICT を活用しながら特別支援学級における自立活動とより接点をもった活動を仕組むことで、自立活動と外国語活動の両方の活動に相乗効果が期待できるという先行研究結果(久保・金森・中山, 2012; 塚田・吉田・中山, 2013)をあらためて支持することができた。さらに、事前に特別支援学級内でトレーニングを行った後、交流学習で同じ内容を扱うことで、児童が自信をもって活動に臨める姿が見られた(松岡・中山, 2014)。

これらの結果は、小学校英語教育学会等のジャーナルにすべて採択され、一般に公開されている。また、最終年度には、一般向けのシンポジウムもおこなった。今後の課題としては、特別支援学級での外国語活動における評価法について、様々な視点から検討される必要がある。ルーブリックなど質的な方法や心理テストをはじめとした客観的な指標に基づく評価など、多面的なアセスメントに向けた取り組みが必要となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

松岡美幸・中山晃. (2014). 「特別支援学級と交流学習での外国語活動の試み」 JES Journal, Vol.14, p.36-49

物井尚子・中山晃・三浦優生 (2013). 「特別な教育支援を必要とする児童に対する外国語活動の可能性」 「言語と人間」研究会(編)『ことばと人間』第9号, 127-143. (研究ノート)

塚田初美・吉田広毅・中山晃. (2013). 「ソーシャルスキル・トレーニング(SST)を導入した特別支援学級での外国語活動」『JES Journal』第13号, 4-18. 久保稔・金森強・中山晃. (2012)「ICTを利用した特別支援学級における外国語活動」『JES Journal』第12号, p.4-18.

〔学会発表〕(計 8件)

Nakayama, A., Yoshida, H., Matsuoka, M., Kubo, M., & Tsukada. H. (2014, March). Foreign Language Activities for Japanese elementary school students with Special Educational Needs. Poster presented at the annual meeting of American Association for Applied Linguistics (AAAL2014). Portland, Oregon.

シンポジウム「司会：中山晃，話題提供者：久保稔・塚田初美・西岡由都，指定討論者：三浦優生・中山晃。(2013, November)。「特別支援学級における外国語活動 - 実践上の工夫とその応用 -」平成23~25年度(独)日本学術振興会 学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) 最終年度成果報告(一般公開型研修・研究会) 於 愛媛大学 松岡美幸・中山晃。(2013, July)。「特別支援学級と交流学習での外国語活動の試み」第13回 小学校英語教育学会 『沖縄大会要綱集』p.62 於 琉球大学 川崎理恵・塚田初美・中山晃。(2012, November)。「特別支援教育に生かすことのできる外国語活動」『第6回 Let's Enjoy English -小学校外国語活動研修会(AEEN 設立10周年記念大会)-』 旭川英語教育ネットワーク(AEEN) 於 旭川市立近文小学校

塚田初美・吉田広毅・中山晃。(2012, July)。「ソーシャルスキル・トレーニング(SST)を導入した特別支援学級における外国語活動」第12回 小学校英語教育学会 『千葉大会要綱集』p.47 於 千葉大学(西千葉キャンパス)

Miura, Y., Nakayama, A. & Heffernan, N. (2012, June). Foreign Language Activities for Japanese Students in Special Needs Education. Poster presented at Insights into applied linguistics: languaging, agency, and ecologies, at University of Jyväskylä, Finland June 4-7.

塚田初美・久保稔・中川麻衣子・篠原沙耶香・中山晃。(2011, November)。「特別支援に生かすことのできる外国語活動：提案と実技演習」

久保稔・金森強・中山晃。(2011, July) 「ICTを利用した特別支援学級における外国語活動」小学校英語教育学会 第11回大阪大会 『大会要綱』 於 大阪教育大学(柏原キャンパス)

6. 研究組織

(1)研究代表者

中山 晃 (NAKAYAMA, Akira)

愛媛大学・教育・学生支援機構・准教授
研究者番号：70364495

(2)研究分担者

吉田 広毅 (YOSHIDA, Hiroki)
常葉大学・外国語学部・准教授
研究者番号：40350897

(3)研究分担者

物井 尚子 (MONOI, Naoko)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：70350527